

## 本文目次

I. 調査の経緯と経過.....	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境.....	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. 福童町遺跡 7 の遺構と遺物.....	7
IV. 調査成果のまとめ.....	9

## 挿図目次

第1図 小都市の地形図.....	2
第2図 調査区周辺遺跡分布図 (S = 1/25000).....	3
第3図 調査区位置図 (S = 1/2500) .....	3
第4図 福童町遺跡 7 a 区遺構配置図 (S = 1/250) .....	4
第5図 福童町遺跡 7 b 区遺構配置図 (S = 1/125) .....	4
第6図 福童町遺跡 3・7 全体図 (S = 1/450) .....	5・6
第7図 1・2号溝状遺構平面図.....	7
第8図 1号落とし穴状遺構平面・土層断面図.....	8
第9図 火葬墓状遺構平面・見通し図 (S = 1/5) .....	8

## 図版目次

図版1	①福童町遺跡 7 a 区全景（直上から、写真上方が北）
	②福童町遺跡 7 b 区全景（上空から、写真上方が北）
図版2	①落とし穴状遺構 土層断面（南東から）
	②落とし穴状遺構 完掘状況（南西から）
	③火葬墓状遺構 検出状況（北西から）
	④火葬墓状遺構 完掘状況（南東から）
	⑤1号溝状遺構 完掘状況（西から）
	⑥2号溝状遺構 完掘状況（南から）

## I. 調査の経緯と経過

### (1) 調査の経緯

本遺跡の所在する小郡市福童字町329-7他は、小郡市役所都市建設部まちづくり推進課が主幹となる「市道小郡西福童3081・3086号線道路改良事業」の対象地となっている。この事業に関連して、平成17年度に福童町遺跡3（事前審査番号05018、小郡市文化財調査報告書第225集）の発掘調査を実施している。福童町遺跡7は、この調査時に農地として利用されていた残地約240m<sup>2</sup>分である。平成18年度に開発事業に関する協議を行なった結果、この残地部分の調査を「福童町遺跡3」とは別事業とし、小郡市教育委員会がまちづくり推進課より予算の執行委任を受けて平成18年度内に発掘調査を実施、平成19年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

### (2) 調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

#### <小郡市役所都市建設部>

部長 細坂弘幸（～H19.3.31）  
高木良郎（H19.4.1～）  
まちづくり推進課長 高木英治  
施設・公園係長 弥永健俊  
内村隆之（～H19.7.1）  
川野哲司（H19.7.1～）

#### <小郡市教育委員会>

教育長 清武輝  
部長 高木良郎（～H19.3.31）  
池田清巳（H19.4.1～）  
文化財課長 田篠千代太  
係長 片岡宏二（～H19.3.31）  
重松正喜（H19.4.1～）  
技師 上田恵

#### <調査参加者> 伊東みさ子 小川高征 田中賢二 林勢津子 森下弥寿治 山田和子

（以上小郡市在住、五十音順）

### (3) 調査の経過

発掘調査は平成19年1月から2月にかけて実施した。調査区はいずれもG.L.1.0～1.5mまでの近年の耕作土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行なった。以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

平成19年1月17日機材搬入、調査区表土の重機掘削 18日b区の人力による遺構検出・掘削開始、火葬墓状遺構・落とし穴状遺構各1基、溝状遺構2条検出 19日火葬墓状遺構を除くb区の遺構を完掘 22日a区の条・ピット群を検出 23日II区の遺構を完掘 24日I区火葬墓状遺構掘削完了 29～31日遺構配置図・個別遺構図作成 2月1日調査区清掃、全景写真撮影 2日重機による埋め戻し 5日機材撤収、現場引き渡し



福童町遺跡7  
北東から調査区・道路改良工事事業地を臨む

## II. 位置と環境

### (1) 地理的環境

小郡市域は筑後川水系の宝満川によって東西に二分される。右岸には背振山系から派生する丘陵（通称・三国丘陵）があり、これが南へいくに従って緩やかに下って平坦な台地へ移行し、筑後平野へと連なる。本書で報告する福童町遺跡は、この台地の南端、舌状に張り出す低位段丘の南西裾から、台地間にある谷底平野にわたって展開している。

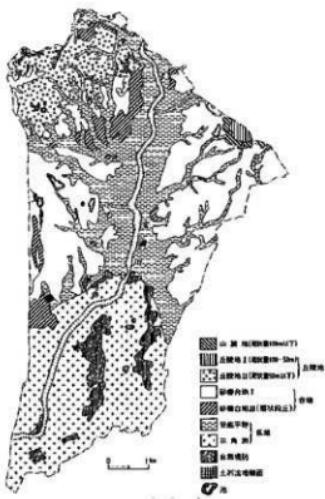
### (2) 歴史的環境

福童町遺跡はこれまでの調査によって、現在の西福童区の集落域とその西側の水田地区にまたがることが確認されている。この地域は佐賀県鳥栖市・三養基郡基山町との県境（旧・筑後肥前国境）に近く、律令制期にこの境界に沿って設置された西海道の存在から、人・物の流入が活発な場所であったと考えられる。「福童」の地名の初見は南北朝期の文献における「福同」「福堂」であり、小郡市史においては中世戦記文学『太平記』

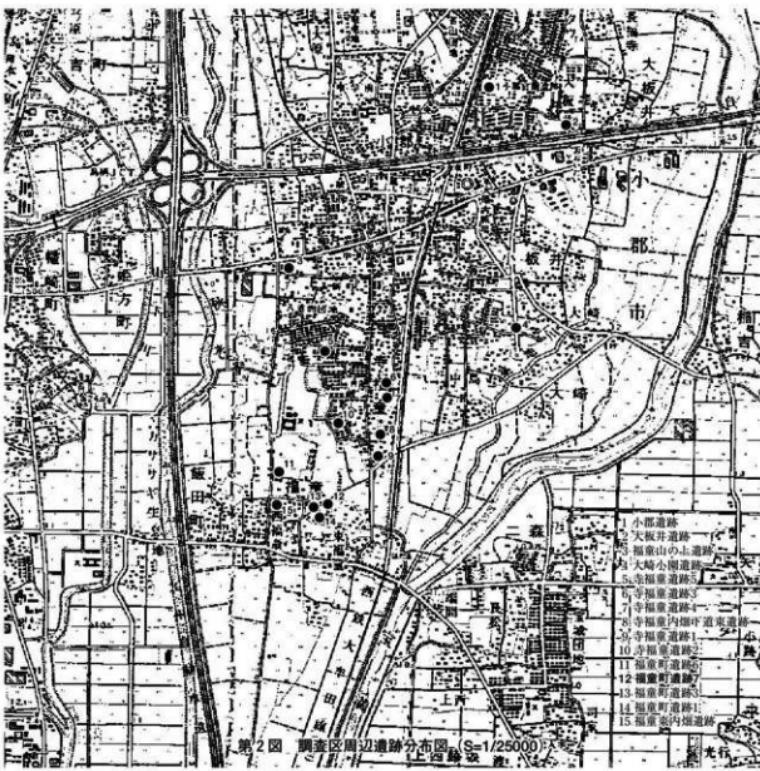
に記された福童原合戦で著名である。近年は道路改良工事・宅地開発に伴う発掘調査事例の増加から、考古資料からの歴史的様相の復元も進みつつある。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に、歴史的様相の概要を示す。

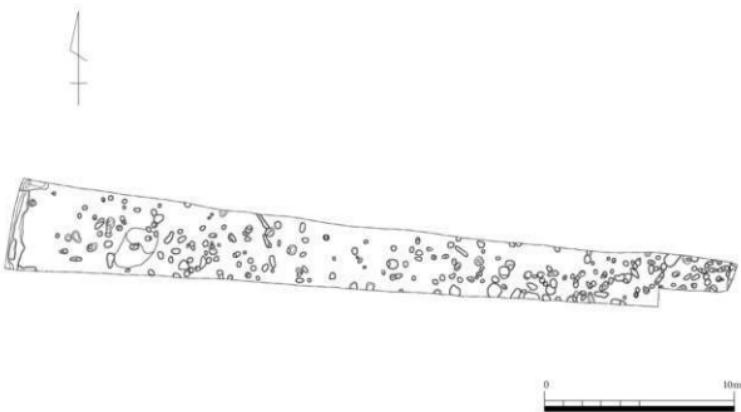
旧石器・縄文時代に関しては、明確にこの時代の所産と判断できる遺跡・遺構は未確認である。但し遺物は市域各所で散見され、福童町遺跡6（11）でも後期の土器片が出土している。本格的な集落経営は弥生時代に始まり、特に三国丘陵上と小郡（1）・大板井（2）では大規模に展開し、玄界灘を中心とする文化圏と有明海を中心とする文化圏との中间に位置する本市独自の様相を示す。本遺跡の周辺では、寺福童遺跡5（5）で前期の木棺墓、中期の豪棺墓群が、また、寺福童遺跡4（7）では中期の銅戈埋納遺構が確認されている。これらを形成した集団の集落は未確認であるが、今後の調査に期待をよせたい。古墳時代に入ると、前時代の集落を繼承する地域がある一方で、新たに外来系の要素を持つ集落が発生する。本遺跡の周辺では、前者に在来系の土器が出土した大崎小園遺跡（4）、後者に古式土器の出土した福童町遺跡1（14）がある。同期の墓域としては、方形周溝墓4基を検出した寺福童遺跡1（9）がある。中期の資料は現在のところ未確認であるが、後期～末期にかけては寺福童内畑下道東遺跡（8）で刀子・耳環を伴う土壙墓が、寺福童遺跡4では堅穴住居群が確認されている。飛鳥・奈良時代には、初期評価とされる上岩田遺跡から、小郡遺跡（1）、下高橋官衙遺跡（大刀洗町）へと筑後國御原郡衙の変遷が知られる。本遺跡の所在する地域は条里痕跡の残る地域であるが、寺福童遺跡2（10）、寺福童遺跡3（6）でこの時期の遺構・遺物を若干確認しているのみで、当時の集落様相を復元できるほどの資料は未確認である。中世に関しては、福童山の上遺跡2・3（3）で掘立柱建物と溝が、福童山の上遺跡4（3）で道路状遺構と土坑・井戸が検出され、龍泉系青磁・白磁が出土している。近世については福童東内畑遺跡（15）で溝が検出され、上質の肥前産陶磁器や在地産の土器がまとった量をもって出土している。

このように本遺跡の周辺では、一部の時期を除いて、弥生時代以来ほぼ連続と人間生活の営みが続けられてきたと考えられる。

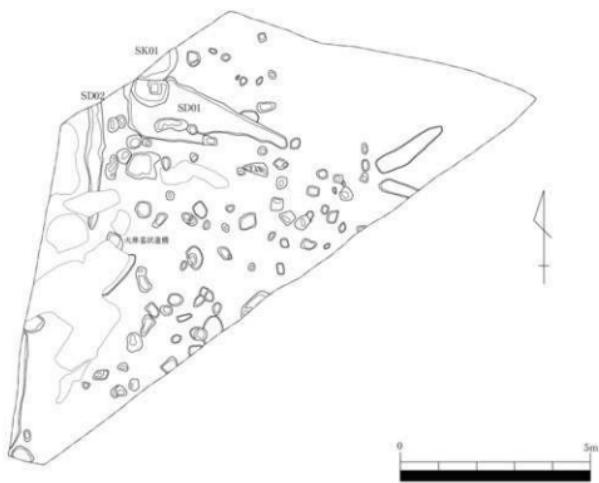


第1図 小郡市の地形図





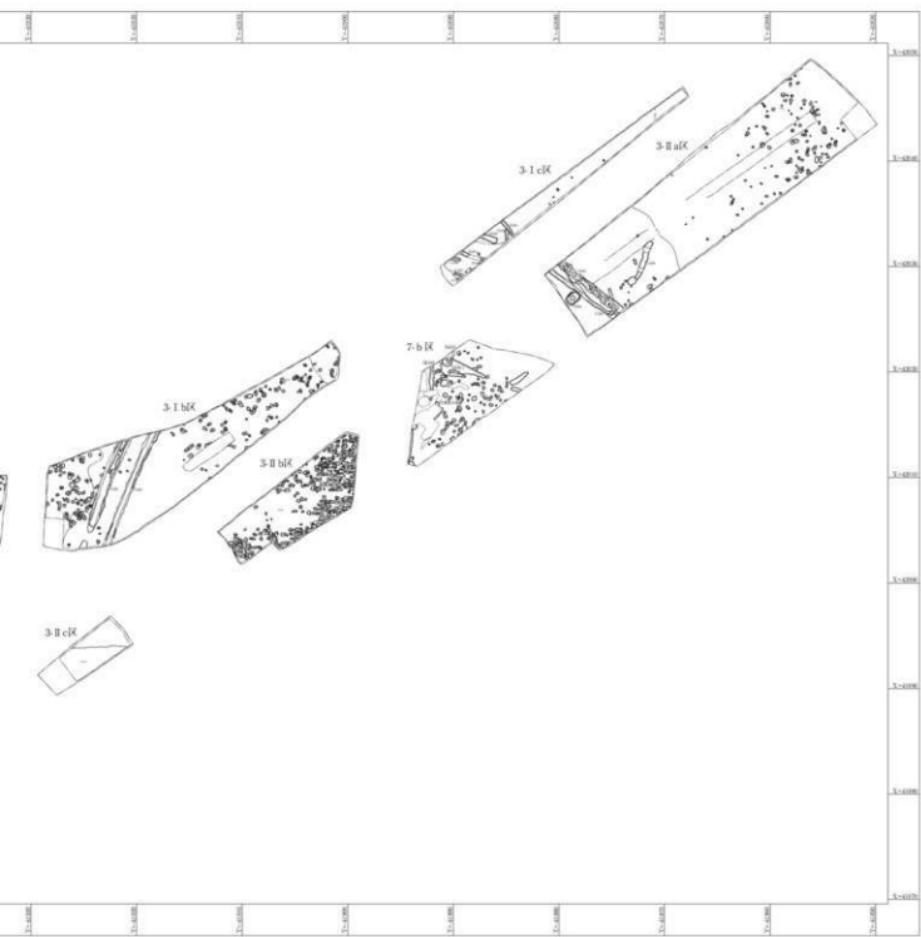
第4図 福童町遺跡7 a区遺構配置図 (S=1/250)



第5図 福童町遺跡7 b区遺構配置図 (S=1/125)



### 第6図 福童町遺跡3・



3・7 全体図 (S=1/450)

### III. 福童町遺跡 7 の遺構と遺物

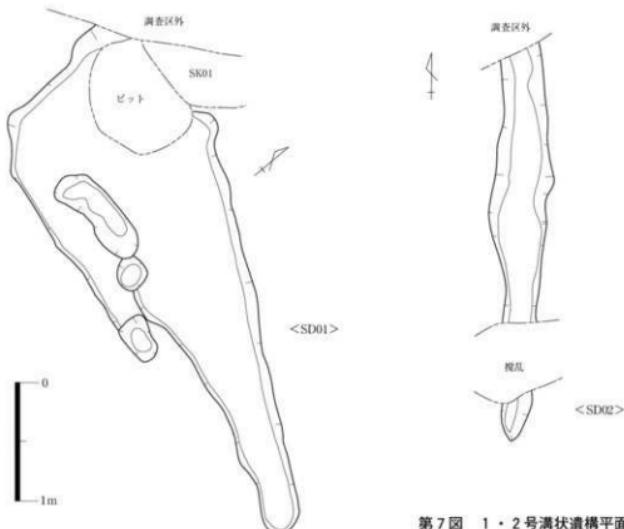
調査区は、既調査地である福童町遺跡3の中心部を挟んで、東西2区画に渡る。調査の手順上、西寄りの148.2mをa区、東寄りの78.4mをb区と設定した。

a区は標高11.95~12.00mの平坦な地形で、褐色ローム層（基盤層）を遺構掘り込み面とする。掘り込み面上面には黒ボク土が極薄く堆積していたが、この層に遺物は含まれない。検出遺構としては調査区全面に分布するピット、西端に一部がかかる溝状遺構1条がある。ピット群はいずれも不整形で比較的浅く、この中に掘立柱建物を構成するものは確認できなかった。埋土に土師器の細片を含むものもあったが、遺構の時期を決定する根拠と成りえるものは存在しない。多くは後世の植樹による掘り込みと思われる。溝状遺構は傾斜の一部が調査区に含まれるのみで、遺構の主体はさらに西側にあると考えられる。埋土は黑色シルトを主体とし、調査区内で遺物は出土していない。その構造・性格については、今回の調査成果のみでは言及することが極めて困難である。

b区は標高11.35~11.70mの北東から南西に向けて傾斜する地形で、a区と同じく褐色ローム層（基盤層）を遺構掘り込み面とする。黒ボク土は低まつた南西部を中心に、部分的に確認するに留まる。調査区西半部は後世の造成によって破壊されており、また東端部では遺構は検出されなかった。b区では溝状遺構2条、落とし穴状遺構1基、火葬墓状遺構1基の他、ピット群を検出している。b区のピット群も不整形で浅いものが多く、掘立柱建物の存在を示唆するような相互の関連性が見られない。こちらも後世の植樹痕跡が大半を占めると考えられる。以下に、主な遺構の個別詳細を記す。

#### 1号溝状遺構（第7図・図版2-⑤）

b区中央北寄りを北西→南東に流れる。幅0.5~0.9m、深さ0.15mを測り、断面は台形を呈する。上部が大幅に削平されているため、原型は判然としない。SK01に先行する。埋土は暗褐色シルトの単層で、土師器が極微量出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。遺構の時期は不明である。



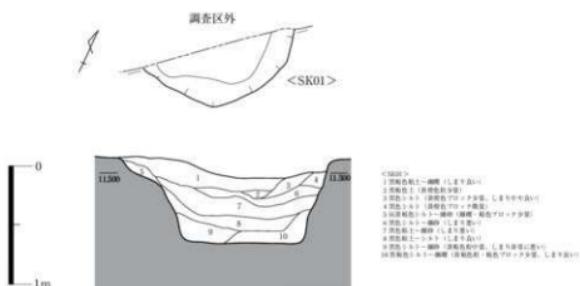
第7図 1・2号溝状遺構平面図

## 2号溝状遺構（第7図・図版2-⑥）

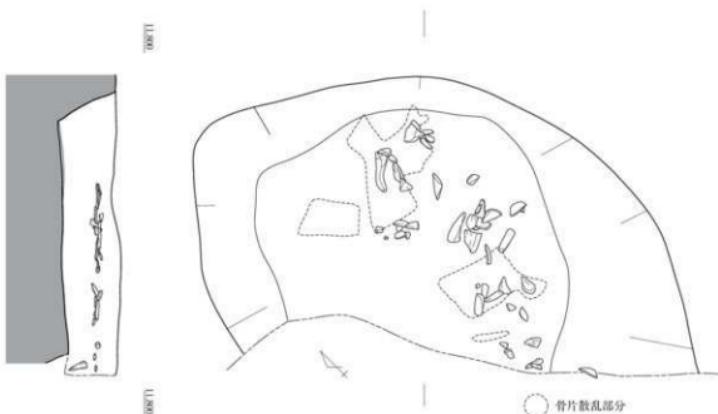
b区北西隅をほぼ正方位で南-北に流れる。幅0.5m、深さ0.1~0.15mを測る。断面は台形を呈し、上部は後世の造成により大幅に削平を受けていると考えられる。埋土は黒褐色シルトの単層であり、微量の土師器が出土している。いずれも細片で時期も不明なため、図示は控える。出土遺物からは遺構の時期を特定できないが、周辺跡で検出された遺構との関連を考慮すると古墳時代前期の所産と想定される。

## 落とし穴状遺構（第8図・図版2-①・②）

b区北寄りに位置し、北半部は調査区外となる。残存幅0.5m、残存長0.65m、深さ0.75mを測る。SD01に後にする。残存部から想定される平面プランは隅丸長方形で、主軸は東西方向と考えられる。



第8図 1号落とし穴状遺構平面・土層断面図



第9図 火葬墓状遺構 (S=1/5)

埋土は黒褐色シルトと黒色粘土、灰黄褐色シルトを主体とし、境界が不明瞭な状態に混和している。埋土から土師器の細片が2点出土しているが、時期は不明であり、小片のため図示は控えた。土坑底面・壁面に杭の打ち込み痕等は確認されていない。出土遺物から遺構の時期は特定できないが、隣接する福童町遺跡3でも落とし穴状遺構が検出されていることから、同一段丘上に展開する一連の狩猟関連遺構と想定される。

#### 火葬墓状遺構（第9図・図版2-③・④）

b区西側に位置し、搅乱に西半部を破壊されている。長さ50cm、残存幅30cm、深さ5cmを測り、残存部から平面プランは不整円形と想定される。上部が後世の造成によって大幅に削平を受けている。埋土は暗褐色土の单層で、径0.1~1.0cmの橙色焼土粒を多量に含む。土坑内から蔵骨器となる土器類は出土していないが、検出時から多量の骨片を確認していたことから、火葬墓と判断した。骨片は調査段階で既に粉状に風化しており、測図が可能であったものも極小片で部位等は不明である。

## IV. 調査成果のまとめ

本遺跡の所在する西福童区においては、本書で報告した遺跡も併せて計9箇所で発掘調査が実施されている。ここでは、これまでの調査成果を概観することにより、今回の調査の意義を明らかにしたい。

本遺跡の南側（市道・小郡西福童3081・3086号線以南）に所在する福童町遺跡1（市報告書203）では、古墳時代前期の2段階に空間を区画する溝を伴う竪穴住居群を主体とする集落域を嚆矢として、古墳時代後期に渡る集落が低位段丘上に經營され、この地域での本格的な人間活動が開始されたことが明らかとなっている。但しこの集落域は南へ延長する可能性こそ残るもの、北・東へは延びず、西側へも福童町遺跡3（市報告書第225集）へわずかに広がりを見せるに過ぎない。なお、これ以前については、福童町遺跡4（市報告書226）で縄文後期の土器が、福童町4・8（市報告書240）で弥生時代中期中葉～後葉の土器を伴う溝状遺構が検出されており、生活圏の存在を示唆しているが、それを証明する遺構は未確認のため推測にとどまる。

本遺跡においては、上記の時期の所産と考えうる遺構は溝状遺構1条のみであり、北西部への拡張の可能性を重ねて打ち消す結果となっている。またそれ以前の遺構・遺物も検出されず、当地域における古墳時代の集落が弥生時代のその系譜を引く可能性もさらに低くなったと言える。かろうじて落とし穴状遺構は確認されていることから、古墳時代以前には狩猟場という生産域としての土地利用がなされていたとの想定を補強することができるだろう。

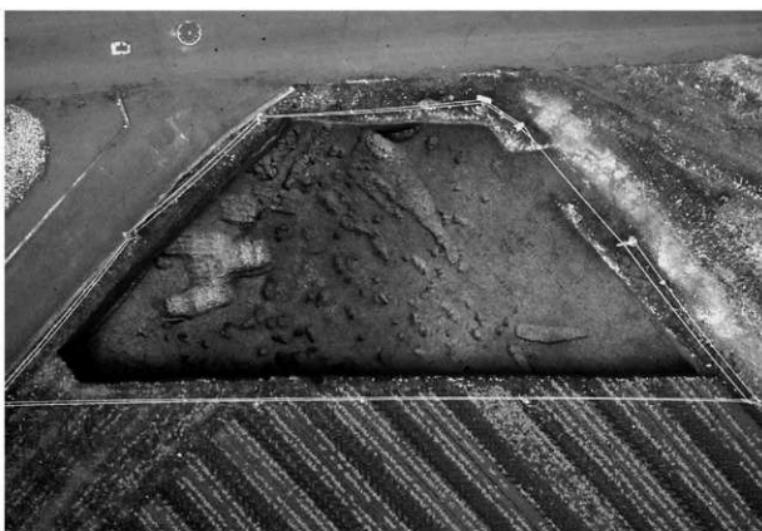
古代から中世にかけては、集落域の一端を示すと見られる遺構の検出が、本遺跡の北北西（市道・下町西福童16号線沿線）に集中する。福童町遺跡2（市報告書207）・4・6（市報告書226）を中心的に、既調査地の南端となる福童東内塙遺跡（市報告書226、県道・鳥柄朝倉線に南面する）から、北端となる福童山の上遺跡群（市報告書75・100・114・170、国道500号線に北面する）に渡って、溝状遺構を主体とする集落構成遺構が確認されている。この傾向は近世に至るまで継続し、近世以降もこれに沿って今日まで集落が展開を見せてきた。対して、古い時期の集落が形成された地区は、福童町遺跡3の溝状遺構を除くと、中世以降の遺構が極めて希薄な状況であり、この時期に一転して生産域としての土地利用がなされた可能性が浮上する。

本遺跡の調査でも、上述のような新しい時期の遺構・遺物は未確認であり、集落域の存在の否定と、目立った遺構の残存しない生産域としての活用を肯定する根拠となりうるだろう。

今回報告した調査事例を含め、これまでこの地域で実施してきた発掘調査は、極めて断片的な情報収集に限られるものである。ここで述べた集落展開について、多分に推測の域をでないものであるが、今後の調査成果の蓄積により、さらに詳細な集落範囲の確定や検出遺構の明確な機能特定、それらの時代変遷といった、歴史復原が可能になることを期待したい。



①福童町遺跡 7 a 区全景（直上から、写真上方が北）

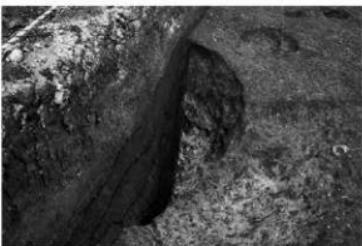


②福童町遺跡 7 b 区全景（上空から、写真上方が北）

図版 2



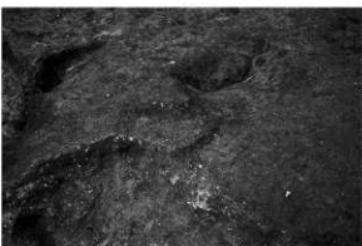
①落とし穴状遺構 土層断面（南東から）



②落とし穴状遺構 完掘状況（南西から）



③火葬墓状遺構 検出状況（北西から）



④火葬墓状遺構 完掘状況（南東から）



⑤1号溝状遺構 完掘状況（西から）



⑥2号溝状遺構 完掘状況（南から）